

田沢稲船

長谷川時雨

青空文庫

一

赤と黄と、緑青が、白を溶いた絵の具皿のなかで、流れあつて、虹のように見えた
り、彩雲のように混じたりするのを、

「あら、これ——」

絵の具皿を持つていた娘は呼んだ。

「山田美妙斎の『蝴蝶』のようだわ。」

乙姫さんの竜の都からくる春の潮の、海洋の霞が娘の目に來た。

山田美妙斎は、尾崎紅葉、川上眉山たちと共に、硯友社を創立したところの眉毛美

しいといわれた文人で、言文一致でものを書きはじめ『国民の友』へ掲載した「蝴蝶」は、
いろいろの意味で評判が高かつたのだ。

源平屋島の戦いに、御座船をはじめ、兵船もその他も海に沈みはてたとき、やんごとな
き御女性に仕えていた蝴蝶という若い女も、一たん海の底に沈んだが、思いがけず、なぎ
さに打上げられた。それは春の日のことで、霞める浦輪には、寄せる白波のざわざわとい

う音ばかり、磯の小貝は花のように光っている閑かきだった。見る人もなしと、思いがけなく生を得た蝴蝶は、全裸まはだかになった——そのあたりを思いだしたのだ。

「あたし、小説を書こう。」

十七の娘、田沢錦子きんこは、薬指ににじむ、五彩の色をじっと見ながら、自分にいった。

空はまつ青で、流れる水はふくらんでいる——

どこにか、雪消ゆきけの匂いを残しながら、梅も、桜も、桃も、山吹やまぶきさえも咲き出して、蛙かわず

の声もきこえてくれば、一足外へ出れば、野では雉子きじもケンケンと呼び、雲雀ひばりはせわしな

くかけ廻っているという、錦子が溶きかけている絵具皿のとけあった色のような春が、五

月まちかい北の国の、蝶の舞い出る日だった。

むかしの、出羽でわの郡司ぐんじの娘、小町の容色をひく錦子も、真つ白な肌をもっている、しか

も、十七の春であれば、薄もも色におつてくる血の色のうつくしさに、自分でも見とれることもあるのだった。その生々しさが湧わきあがったとき、この娘は、

——なんて拙ますいんだろう。

と、自分の描く絵が模写にすぎないのを、腹立たしくなっていた。

——この色は出やあしない。こんな、綺麗きれいな色は、ちつとも出やあしないじゃないか、残念だが——

彼女は、自分の腕に喰くいつくこともあった。と、そこにパツとにじみだして開いてくる命の花のはなやぎを、どんなふうにも色に出したら写せるかと、瞋みづめながらヒをなげた。

ヒを投げたといえ、錦子はお医者さまの娘だ。徳川時代には、おヒといえ、御殿医であることがわかり、医者がヒを投げたといえ、病人が助からぬということであるし、ヒを持つといえ、内科医のことだった。これは漢法医が多く、漢薬は、きざんであったのを、盛りあわせて煎せんじるから、医者は薬箱をもたせ、薬箱には、柄えの永い、細長い平たいヒ——
——連翹れんぎょうの花片はなびらの小がたのかたちのをもっていたものだ。

錦子の家は出羽の西田川郡であったが、庄内米、酒田港と、物資の豊かな、鶴岡の市はずれではあり、明治廿年代で西洋医学をとり入れた医院だったから、文化の低い土地では、比較的新智識の家族で、名望もあつた。

——あたしの画はまずい。

と、思う下から、山田美妙斎の小説は、なんと素すばらしく、女の肉体の豊富さを描きつくしているのだらうと、口惜くやしいほどだった。

錦子は、水に濡れ浸った蝴蝶の、光るような、なめらかな肌が、目の前にあるように、眼をよせて眺めていた。小説の中の蝴蝶も、自分の年とおなじ位だと思うと、彼女は自分の肌を、美妙齋に、描写されたように恥しかった。それは、いつぞや、自分のことを言つてやつた文に、

——体に、脂があると見えて、お風呂にはいった時も、川で泳いだときも、水から出て見ると、水晶の玉のように、パラパラと水をはじいてしまつて——

そんなふうに、書いたこともあつた氣もするのだ。

——ええ、泳ぎますとも、まっぱだかで——とも書いたようだ。

——田沢湖は秋田です。うつかしい郡司の娘が、恋人を慕つて身を投げたという湖は、それは先生、田沢という姓名からのお誤りでしよう。田沢いなぶねは、ピンピンしています。此処には、近くでは、大岸の池というのがあります。あたくし、真つ白な鵬に乗った、あたくしの水浴の姿を描きたいのですが、駄目ですわ——

そんなふうにも書いたことがあつたようだったが——どうだろう、「蝴蝶」は、もつと前に出ているのだ——

錦子が、いくら呟いても仕方なかった。彼はとうとう大きな溜息をした。

錦子は、絵の具皿の中から、白と紅とが解けあつたところを、指のさきに掬いとると、傍の絵絹かたわぬぎぬの上へ、くるりと、女の腰の輪かくを一息に丸く描いて、その次には、上の方へもつていつてポチリと点を打った盛り上もあがりをおいた。

その反対の方へむけて、腕の曲折を、ふつくらとつくと、それは、思いがけない生々しきで錦子の前へ、若い女が横たわつて、羞恥しゆううちを含んでいる――

「おお、蝴蝶どの、そなたの姿はわらわによう似ていられる――」

歌舞伎役者のせりふもどきで錦子は、満足した自分の体も、そこへ、その通りの姿態ポーズで肘ひじを枕にして、ころがった。

――小説にしようか、絵の修業をしようか――まとまりのない空想が、あとからあとから湧わいてくる。つい、うつとりとしていると、

「あら、これ、何なの？」

妹がその絵を、見ているのは好いが、その後から母も来る様子なのに、錦子は慌あわてた。

「その、小説の口絵を、真似まねたのよ。」

そう言つて妹はごまかせても、母親の眼は恐こわい。絵の具が乾かわかないで、生々して見えるその尻かっこうの恰好は、娘の尻の肉つきそのままであることを母親は、一目で見破るであろう。

乳首の出ぬ丸いさしぢちは？

—— おお、まあ、なんてこの娘は、いやな——

と、呆れて、眼を反そむけながら角立つのだてるに違ちがいはない。

いつも、いつも、お前はなんて早熟ませいているのだろうと呟つぶやく母親には、見られたくなかつ

たので、錦子は跳はねおきると、乳房おちちは朝あさにしてしまい、腰の丸味は盥たらにしてしまった。

錦子は、まったくませていた。売出しの小説作家、山田美妙斎に文通しだした。だが、

小説「蝴蝶」の書かれたのは、二、三年前だが、近頃になって、「蝴蝶」の出ていた、

『国民の友』の新年附録を、探し出して読みふけり、すっかり魅了され、心酔しつくして

しまった。そして、急に、グイグイ引き寄せられる気持ちになっている。錦子が動かされ

たのも無理はないほど、美妙斎の「蝴蝶」は、発表された当時も世評が高かったのだ。そ

のころ仲たがいをしていた尾崎紅葉さえ、宛名あてなを、蝴蝶殿へとした公開状で、

かくすべき雪の肌はだえをあらはしてまことにどうも須磨すまの浦風

と、一首ものしたように、それには挿絵さしえに、渡辺省亭わたなべせいの日本画の裸体が、類のないこ

とだったのだ、アツといわせもしたのだった。

河井醉茗かわいすいめい氏の『山田美妙評伝』によると、美妙斎は東京神田柳町に生れ、十歳の時に

は芝の鳥からすもり森校から、巴ともえ小学校に移り、神童の称があつたという。十三歳に府立二中に入学したが、学科はそつちのけで、『太平記』や、『平家物語』をはじめ、江戸時代の草く双紙さざうしの中では馬琴ばきんに私淑したとある。芝に生れた尾崎紅葉とは、二中の時おなじ学校で、紅葉が三田英学校から大学予備門にはいると、二級の時に美妙斎が四級にはいり、旧交があたためられて、二人は文学で立とうという決心をあかし合い、しかも、芝からでは遠いというので、美妙斎の家は、学校に近い駿河台するがだいに引越して、紅葉も寄宿し、八畳へやの室に、二人が机を並べ、そのうちに、おなじ予備門の学生石橋思案いしばしあんも同居し、文壇ふとうびを風靡した硯友社けんゆうしゃはその三人に、丸岡九華きゆうか氏が加わって創立され、『我楽多文庫がらくたぶんこ』第一号が出たのは明治十八年五月二日だと考証されている。

その石橋思案氏が、後に脳をわずらわれたが、稲舟いなぶね女史の話を私にしてくだされたのだった。

錦子は自分のしたことがおかしくなつて、クツクツ忍び笑いを洩もらしながら、

ひとり さける のばら あわれ

あかぬ いろを たれか すてん

のばら のばら あかき のばら――

と唄^{うた}いかけた。この詩も、美妙の「野薔薇^{のばら}」というの一節だったが、妹は、後^{うしろ}に立った母親に言った。

「姉さんて、妙な人ねえ。お琴を弾^ひいても、唄^{うた}わないくせに、ねえ。」

けれど、その妹が、敵は幾万ありとても、すべて烏合^{うごう}の勢^{せい}なるぞ——という軍歌が、おなじ人が、早く作つたものだということは知らないでいた。

「錦子は、お父さんのお許^{もと}しが出そうなので跳^はずんでいるのだよ。」

と、母は、錦子の室^{へや}の中を見廻^{みまわ}して言った。

「姉さんがいなくなると、さびしいねえ。」

錦子は、母親が現^{あら}われたのでさつきからの、躍^{おど}るような——火花が指のさきから散るような氣持^{きもち}を、凝^じと堪^たえて、握^{にぎ}りしめた手を胸におしつけていたが、思わず

「あら！ 東京へ行ける。」

と、感情の、顔に出るのを、さとられまいとしながら、せかせか言った。

「でもね、本当に、美術学校^{びじゅつがく}つて、女も入学出来るのだろうか、お父さんは御心配なさつてたが。」

「出来ないはずないでしょ。済^{さい}生^{せい}学舎^{がくしゃ}（医学校）だって、早くっから、女を入れたので

しよ。」

「そうらしいけれどね。」

母は、娘を、非凡な才智をもつものと見ている。それは、雪深い国では、何処にもちよつと見当たらない、薫りの高い一輪の名花だった。

この娘を東京へ出して、思うままに修業をさせたら——それこそ小野の小町などは、明治の、才色兼備の娘に名誉を譲るだろう。

そう思う母^{はは}人の生れ育った時代は、幕末、明治と進歩進取の世に生れあわせていた。

奥羽の各藩もさまざまの艱苦^{かんく}の後、会津生れの山川捨^{すてまつ}松は十二歳（後の東大総長山川健次郎男の妹、大山巖公^{いわお}の夫人、徳富蘆花^{とくとみろか}の小説「不如帰^{ほととぎす}」では、浪子——本名信子さん

といった女の後の母に当る人）、津田英語塾の創立者津田梅子女史は九歳、その他、七、八人の、十七、八歳を頭にした一行と、海外へ留学した最初の人を出したりして、その後も、何やかと、幕末からつづいた、新旧の、女丈夫たちに刺戟^{しげき}されて来ているので、東京では、もうすっかり急進欧化の反動期にはいつているときに、奥羽の隅^{すみ}の家庭人は、かえって、そのころになつて動いていた。

「あたしも、なるだけ、出してあげたいと、骨を折っているけれど——」

彼女は、娘の描いた、おとなしい絵を手にとって眺めて沈呻した。

——この娘はもつと強い子だが——

琴を弾^ひかせても黙つて弾^ひいている。あれは、あの時、胸のなかに、何か、物足らない思いが一ぱいに詰まっているのだ。この娘は、何も言わないが、どんなことを考えているか知れたものではないと、母親には、それが心配なのだ。

けれど、錦子が琴をかき鳴らしても唄わないのは、邪念があつたのではない。琴の糸の奏^{かな}で出すあやは、彼女の空想を一ぱいにふくらませ、どの芽から摘んでいいかわからない思いが湧^{わきあ}上^あるのだ。どう整理してよいか、まだ、そのわけが分^は明^{つき}としないものが醜^{はづ}し^こしかけてくるのだ。だから彼女は、うっとりとしたような、不機嫌のような、押だまつたままにいるのだ。だがとうとう、錦子は、朝夕眺めた、鳥海山も羽黒山も後にして、出京することになった。

二

山田武太郎と表札の出ている、美妙齋の住居^{すまい}を訪れた、みちのく少女^{おとめ}のいなぶねは、田

舎娘が来たのかと、気にもかけなかったであろう美妙に、ハツと目を瞠^{みは}らせた。

美妙は、たしか二十歳ごろから四、五年の間、女学生向きの『いらつめ』という月刊雑誌を出したりして、若い女性たちとも、顔をあわせることも多くあつたし、その時分も、浅草公園裏の薄茶の店の、石井おとめとの関係もあつたのだが、この小説家志願娘には心をひかれた。

——いなにはあらぬいなぶねの——

そんな句も、詩人美妙の胸には、ふと浮かんだかも知れない。

「稲^{いなぶね}舟^{ふね}って好い名だな。錦子さんでも好いけれど、最^も上^が川^{がわ}がそばなのでしょう。みちのくというと、最上川だの、名取川だの、衣^{ころも}川^{がわ}だの、北^{きた}上^が川^{がわ}だのって、なつかしい川の名が多い。父が、ずっと、あっちにいたからかも知れないが——」

美妙は、無口な娘を前にして、そんなことをいった。

美妙斎のお父さんは、維新前後奥州の方にいつていて、美妙の武太郎は明治元年の夏留守中に生れたのだった。その後、長野県の方にお父さんは警部をつとめていて、美妙は、やかましい祖母^{おばあ}さんと、お母さんに育てられた、内気な、おとなしい息子^{むすこ}だった。

父親^{なつか}が懐^{なつか}しかった少年時を思出して、美妙は、あっちの方の川の名など数えたりして見

た。

「絵はやめてしまうのですか？」

「ええ。」

「小説を書こうというの？」

「ええ。」

十七でしたね、と訊いてから美妙はおもしろい暗合を思い出していた。

十七という年齢は、才女に、なにか不思議なつながりを持つのか、中島 湘 煙 女史

(自由党の箱入娘とよばれた岸田俊子)も、十七歳のとき宮中へ召され、下田 歌子 女史も、

まだ平尾 銆子 といった時分、十七で宮中官女に召され、歌子という名をたまわったのだ。

そのほかにと考えながら、

「田辺 龍子 (三宅 龍子・雪 嶺 氏夫人) さんも十七位だったかな、小説を書きはじめての

は、そうだ、木村 曙 女史も十七からだ。」

と、日本の、明治の、巾 幗 小説家たちの、創世期時代の人々の名をあげたが、それは、

そんな古いことではなかったから、錦子も、おぼろげながら知っていた。

「あたくしに、書けましようか。」

唐人髷とうじんまげの、艶つややかなのと、花櫛はなぐしばかりを見せているように、うつむいてばかりいる

娘は、その時顔をあげて、正面に美妙齋と眼を合わせた。

生際はえぎわの、クツキリした、白い額が、はずかしさに顔中赤味をさしたので、うつくしく

匂った。女らしさがすぎるほど、女らしい女だった。

肉附きの好い丸顔で——着物は何を着ていたかわからないが、彼女が次の年に「白薔薇しろばら」

を書いたなかに、赤襟、唐人髷の美しいお嬢さまが、九段くだんの坂の上をももの思いつつ歩く姿

を、人の目につく黄八丈きはちじょうの、一ツ小袖に藤色紋縮ちりめん緬ひふの被布をかさね——とあるのは、

尤も当時の好みであつたから、それを応用しても間違いはなからう。唐人髷が大好きだつ

たことは友達が知っている。

美妙齋は二十七になつた美丈夫だ。白哲はくせき、黒髪、長身で、おとなしやかな坊ちゃん育

ちも、彼の覇氣はきは、かなり自由に伸びて、雑誌『都の花みやこ』主幹として、日本橋区本町の金

港堂書店から十分な月給をとっていたうえに、創作の収入も多かった。

衿ゆきを、いくら伸して見ても、女の着物の仕立は、一尺七寸五、六分より衿は出ない。

大柄な娘というのではないが、錦子はシツクリした肉附きだ。丸い肩の上に、五分ほ

どつまんだ肩上げが、地方から出て来た娘々して、何処か鄙ひなびているのを、美妙は、掘りたての、土の着いている竹の子のように、皮を剥むいていった下の、新鮮なものを感じていた。

立つた姿も、思いがけなく、すんなりしているのに、この娘のアクをおとしたならば、素晴らしいと見た。

この娘が、無口でいて、体で、何か雄弁に語っているのに気がつく、紙へ書かせたならば、無口なだけに、案外大胆なことを書くのではないかと思つたのだろう。

「絵を習うよりは、君は、書いた方が好いいかも知れないね」
と、力を入れてやつても好いいふうと言つた。

アクをおとしたならば、と美妙は錦子を見たが、そういう美妙もアクのある好みの方だつた。何かの好みも、紅葉とは違つていた。

それは、紅葉は町の子であつて、美妙は神田ツ子でも、警部さんの息子で、家庭が、京阪でいうモツサリしていたからでもあるが、大学予備門にいた、十九歳ごろから、小説で売出してからでも、長靴好きでよく穿はいていたということだ。

だがまた、それは、明治の初期から二十年ころまではそうしたふうがハイカラだったの

だ。ハイカラ——高襟は、もつと、ずっと後日で生れた言葉だが、言い現すのに都合が好いから借用する。芝居の、默阿弥もくあみもので見てもわかるが、房ふつさりした散髪を一握り額にこぼして、シャツを着て長靴を穿はいているのが、文明開化人だ。しかも、金巾カナキンのポツサリした兵児帯へこおびを締しめて、ダラリと尻しりへ垂たらしている。これも後には、白か紫の唐縮緬モスリンになり、哀れなほど腰の弱い安縮緬ちりめんや、羽二重絞りの猫じやらしになったが、どんな本絞りの鹿かの子こでも、ぐいと締る下町ツ子とは、何処か肌合はだあいが違っている。しかし、絞りをしめだしたのもずっとあとだ。

とはいえ、年少にて名をなした、美妙齋の額は、叡智えいちに輝いていた。

ことに、その時分は、紅葉、眉山、思案、九華と、硯友社創立時の友達たちを向うに廻して、金は這入はいるが、「蝴蝶」を発表当時ほど言文一致派の気焰きえんは上らないで、西鶴さいかく研究の方が、頭角を出して来たうえに、言文一致は、二葉亭四迷ふたばていししめいの「浮うきくさ」の方が、山田より前だのあとだのと論あげつらわれたり、幸田露伴の「五重の塔」や「風流ふうりゅう仏」に、ぐつと前へ出られてしまつてはいたが、美妙齋の優男やさおとこに似合ぬ闘志さかんなのが、錦子には誰よりも勝まさつたものに見えもすれば、スタイルも好きだった。

「先生。」

と、彼女は、離れともない思慕もまじえて、

「あたくし、一生懸命になります。当^{いま}今どんな方たちが、女で、小説をお書きになったらつしやいます。」

^{ざぶとん}座蒲団の隅を折りながら、うつむきがちに、それでも、ハッキリと言った。

「さあ！ 樋^{ひぐち}口^{いちよう}一葉という人が、勉強しているというが——三^{みやけ}宅^{ちやけ}龍子、小^こ金^{かね}井^い喜^き美^み子、

若^{しずこ}松^{まつ}賤^{せん}子——その人たちかな。あなたのように、書こうとしている女^{ひと}はあるでしょうよ。」

「その方たち、どういう方なのでございます。」

「小^こ金^{かね}井^い喜^き美^み子さんは、森^{もり}鷗^{おう}外^{がい}さんの妹^{いもうと}さんです。」

「あ。あの『舞姫』をお書きになった、鷗^{おう}外^{がい}先生^{せんせい}の？」

「小^こ金^{かね}井^いさんは、ふらんすの翻^{はん}訳^{やく}。若^わ松^{まつ}賤^{せん}子は英^{えい}語^ごもので、両^{りやう}方^{かた}とも強^{しやう}かりしている。若^わ松^{まつ}賤^{せん}子は明^{めい}治^ち女^{にょ}学^{がく}校^{こう}の校^{がう}長^{ちやう}さん^{さん}の夫^{つま}人で、巖^{いわ}本^{ほん}嘉^か志^し子^こというの^のが本^{ほん}名^なだ。」

美^み妙^{めう}齋^{さい}は眼^めを窓^{まど}の外^{そと}にやつて、この娘^{むすめ}を送^{おく}つてやりながら散^{さん}歩^ぽしてもいい日^ひだと思^{おも}つて
いる。

窓^{まど}は八^{はち}畳^{じやう}の室^{むろ}にあつて、八^{はち}、九^く年^{ねん}前^{ぜん}には、学^{がく}生^{せい}だつた紅^{こう}葉^{えつ}山^{さん}人^{じん}が同^{どう}居^ぐして、机^{けい}を並^{なら}べて、
朝^{あさ}から晩^{ばん}まで文^{ぶん}学^{がく}談^{だん}をやつていたといふことや、北^{きた}向^{かう}きだから冬^{ふゆ}は寒^{さむ}いといふことまで、

窓をあけてお茶の水の土手を見渡しながら、美妙斎はへだてなく語った。

そんなに気の合った紅葉が、たつた三、四日で、飯田町の祖父母の宅へ越していつてしまったのは、窓が北向きで、寒いばかりではなかった。長く、後家同様に暮している山田の母親と、その姑にあたる、とても口やかましい祖母とがいて、おとなしい孫息子を、引つかかえすぎるのに、煩きくなつて越したのだが、その事だけは、美妙斎はいわなかった。

神田川にそそぐお茶の水の堀割は、兩岸の土手が高く、樹木が鬱蒼として、水戸家が聘した朱舜水が、小赤壁の名を附したほど、茗溪は幽邃の地だった。

徳川幕府の士人の大学、昌平黌聖堂の森は、まだ面影を残し、高等師範学校の堀は見えるが、かかったばかりのお茶の水橋は、細く、すつと、好い恰好だ。錦子も立つて眺めた。鶯がさき鳴きをし、目白が枝わたりをしている。人声もきこえぬ静かさで、何処からか謡の鼓の音がきこえてくる。

「君は、やっぱり一ツ橋の女子職業学校にしましたか？」

美妙斎は錦子を、傍におきたい慾望をもって言った。

東京見物をするならばと誘われたが、錦子は、麹町の女学校に、おなじ郷里から来

ている友達が、外まで迎えに来てくれるはずだからと断った。

帰りがけに、書いて持って来ていた小説を、美妙の机の横において、目を通してくれと
いった。山田の門かどぐち口まで迎いに来ていたのは進藤孝子という仲のよい友達で、その女の
生家も、鶴岡市の医者だった。

錦子と孝子が逢えば、話はいつも詩のことだった。孝子は新体詩を好んだので、美妙が、
美しい詩ばかりでなく、「貧」というのでは、紙屑かみくず買いをうたっているといえ、錦子
は、坑夫の詩もあるし、車夫の小説もあると負けずに言う。

この二人が文壇の見立みたちを探しだして、面白がつて、くらべっこをした。

「凌雲閣りょううんかく登壇人（未来の天狗木葉武者てんぐこくばむしや）つてのがあるわ。浅草公園、十二階のことで
しよ。」

錦子が展ひろげると、孝子が首をのぼして、

「エレベエタア休止中、螺旋階らせんにて登りし人——とあるわ。」
と、読みだした。

「頂上十二階までが、春のや主人——坪内逍遙つぼうちしやうようよ。それから、森鷗外、森田思軒しけん、依よ
田学海だくかい、宮崎三昧さんまいどうじん道人。」

「あたしにも読ましてよ。」

と錦子は引きとつて、

「エレベエタアにて一分間に登りし人、頂上十二階まで紅葉山人、露伴子、美妙斎主人——いいわね。」

錦子は、いぢご苺のような色の濡れた唇で、

「十一階が二葉亭だわ。それと、さざなみさんじん漣山人。十階にひろつりゆうろう広津柳浪とえみすいじん江見水蔭よ。五階

目通過中に川上びざんじん眉山人がいる。いい気味だわ。」

「どうして。」

と孝子は笑つた。

「硯友社だからでしょ。」

「投書家つて、よく何か知っているものね。ねえ、この凌雲閣の登りかたで、古い人のことも解るわねえ。」

それは錦子のいう通りだった。彼女たちが見ている十二階登壇人の続きには、

開業以前、建築中より登壇したる人というのに、すえまつせいひよう末松青萍、おうち福地桜痴、りゆうけ矢野竜溪、すえひろてつちよう末広鉄腸がある。

夫松さんは伊藤博文の愛媚あいせいで、若い時から非常な秀才と目されていた人だったという。明治十二、三年時分——もつと早くからかも知れない——演劇改良、国立劇場設立をとなえている。桜痴居士こじは、現今の歌舞伎座を創立し、九代目団十郎のために、いわゆる腹芸の新脚本を作り、その中で今でも諸方でやる「春雨傘はるさめがさ」が、市川家十八番の「助六」をきかせて、蔵前くらまえの札差町人、大口屋おきやう暁雨の俠氣きやうきと、男達おとこだて釣鐘庄兵衛の鋭い氣き魄はくを持つて生れながら、身分ちがいの故に腹を切するという、その頃では、まだ濃厚に残っていた差別待遇を諷ふうした作を残している。

その芝居へ出てくる、葛城太夫かつらぎたゆうと、丁山ちやうざんという二人の遊女が、吉原全盛期の、おなじ張はりと意氣地いきじをたつとぶ女を出して、太夫と二枚目、品位と伝法でんぽうとの型を対立させて見せてくれた。そしてそれには丁度よく美しく品位ある中村歌右衛門や、故人の沢村源之助という、伝法肌でんぽうはだな打ってつけの役者がいた。

末広鉄腸は、早く「溪間の姫百合」を出して、明治小説界の最も先駆者だが、その人たちは学者であり、政治家であり、社会人としても重きをなしていたから、十二階の高さにも、建築前に達していたというのであろう。

事務員に黒岩くろいわ涙香小史なみかうしがいる。『万朝報よろずちやうほう』の建立者で、ユーゴーの「ミゼラ

ブル」や、その他「モンテ・クリスト」をはじめ、沢山の翻訳があつて、ああしたもの、その頃の一般大衆にも読ませてくれた恩人だった。

奥山閣から——花屋敷とよばれた中であつた、宇治の鳳凰堂ほうおうどうのような五層楼——凌雲閣を睨にらむ人に正直しょうじき正太夫しょうだゆうの緑雨りよくう醒客せいきゃくのあるのも面白い。

上野山から眺めている連中のなかには、不知庵主人内田魯庵ろあんがあり、漢詩の大家で、業病うびようにかかり妹の曾恵子そえこを熱愛していた義弟勇三郎がその病の特効薬だときいて、他人の尻肉しきを斬りとつたりしたのち、死刑になつた事件を引き起したりした、気の毒な野口寧ねい斎さいがある。

「ちよつと、ちよつと、これ見ない？ 見たくなければ見せない。」

と、孝子が、ヒラヒラと見せびらかした一枚には「明治文学界八犬士」の見立みたちがある。滝沢馬琴ばきんの有名な作、八犬伝の八犬士の氣質風貌ふうぼうを、明治文壇第一期の人々に見立てたのだ。

「あら！ 犬江親兵衛が美妙斎よ。」

と、錦子はよろこんだ。親兵衛は一番若くつて、ピチピチしている人物だった。

その親兵衛が美妙で、色ならば緑、草木ならば豊後梅ぶんごうめだとある。

「豊後梅は、実が大きくつて、生で食べても、梅干にしてもおいしい。」

「そんな、自慢ばかりしていないで、他^{ほか}のも読んでよ。」

と、孝子は笑った。

犬山道^{どうせつ}節が森鷗外で、色は黒、花では紫苑^{しおん}。犬飼^{いぬかい}現八は森田思軒で、紫に猿猴^{えんこう}杉^{すぎ}。犬塚^し信乃が尾崎紅葉で緋色^{ひいろ}と芙蓉^{ふよう}。犬田小文吾^{こぶんご}が幸田露伴、栗とカリン。大法師が

坪内逍遙で白とタコ。

「緑は、すつきりしていて好いけれど——もうちつと。」

と錦子が色に不服をいうと、孝子が「花見立」というのから、

「桃よ、美妙齋は桃よ、紅葉は桜見立よ。」

と選^えりだした。

三

錦子は出京してから、一ツ橋の学校にも近いので、神田猿楽町^{さるがくちよう}の親戚^{しんせき}の家に泊つていた。

小さい家ではあったが、黒塀の中から、深張りの洋傘こうもりをさしたりして、錦子が出てくると、附近には法律学校や医学校の書生が多かったので、目をひいた。

駿河台するがだいの山田の家とはいくらかも距離がなかったから、自然と足近くなっていった。美妙は文学者の話をよくしてくれた。そのうちに、手を入れてやった錦子の小説を、発表してくれるとも言った。

駿河台の東紅梅町には、ニコライニコライ教会が落成して間もなかった。あんな高台へ、あんな高い建築を許して勿体なくも皇居のお屋根まで見えると、憤慨するものもあつたほど巍然ぎぜんとした、石の壁と、銅瓦がわらの、塔の屋根は尖とがっているが円く、妙致を極めたものだった。

「昔だと、南蛮寺とでも、いったのでしょね。これがニコライ寺さ。露西亞ロシアの国教です。日本へ伝道に來た坊さんの名をとって呼んでるけれど、ほんとは、基督キリスト復活聖堂というのですと。」

と、広壮な、寺院の廻りを、並んで歩きながら、美妙斎は、鐘楼の高さを、百二十五尺あるのだと語りながら、

「そういえば、あなたの髪の毛は赤いね。」

と、洗い髪をそのまま、チョンピンにして、白い大幅のリボンを、額の上へ、大きな蝶の

ように結んで、紫の袴はかまを胸高むなたかに穿はいている錦子を凝じつと見て、

「稲舟なんていうより、君がそうしていると、この建築物によく似合っている。ほんとに
好いい、ほんとに好いい。」

と、すこし離れて、透すかして見るようにした。

「おかしな女ひとだ。日本鬘がみを結ゆうと黒い毛なのにな。」

「いいえ、赤つ毛なんですわ。」

錦子が、はずかしがつて項垂うみだれると、頸くびすじから背中うぶげの生毛のぞが金色に覗のぞかれた。

片翳かたかげりの、午後の街まちではあったが、人つこ一人通らない閑静さで、蜥蜴とかげが、チヨロチ

ヨロと歩道を横よこぎつてゆくほどだった。美妙斎はおさえきれないように、いたずらっぽく

錦子の髪の毛をひっぱった。

見る見る、錦子の耳みみが、葉は鶏頭けいとうのような鮮紅あかさの色になって、軀からだをギュツと縮め、

いよいよ俯向うつむいてしまった。

と、片側の赤煉瓦れんがの、寮舎——ニコライ寺の学寮——の窓から、讚美歌が洩もれて来て、
オルガンの合奏もきこえたので、美妙斎は錦子を抱かかえるようにして歩き出した。

そんなことがあってから後だった。孝子に逢うと、錦子は、

「嫌になつちまうわ。」

と呟つぶやいた。

「学校でね、跡見玉枝先生あとみぎよくしが、あたしの絵のことをね、あんまり濃艶のうえんすぎるつて仰おつしやるのよ。それだけなら好いけれど、ベタベタしているつて言うんですもの——」

「絵がなの？」

孝子が問いかえたことは、それは、女生徒の間にも、女教師たちの間にも、不言不語いわずかたらずに考えられていることなのだ。彼女が描く絵はとにかくとして、出京当時にくらべると、びつくりするほど急に女づくつて、毎日々々綺麗になつてゆくのが、目に立つのだつた。

「あたし、種々いろいろなことを覚えようと思つてるのよ、山田先生に教えて頂いて——」
と、錦子はいった。

「ちよいと、文学者たちつて、紅さまだの、美さまだのつて、手紙に書いてたのね。あたし、紅より、つていう手紙見て、ちよいと怒つたことがあるの。そうしたら、紅葉さんですつて。」

六月の日が照りはじめると、稗^{ひえまきや}蒔屋や、風鈴屋や、金魚売、苗売の声が、節^{ふし}面白く季節を町に触れ流してゆくようになった。

本郷台も駿河台も、すっかり青葉になつて、お茶の水橋はまっさおな間に、細く白く見えるようになり、下ゆく水は、覗^{のぞ}かなければ見えなくなつた。夜は、関^{せきぐち}口の方から螢^{ほたる}が飛んで来て、時^{ほととぎす}鳥も鳴きすぎた。

その頃、どうかすると美妙が、じりじりしているのを、錦子は見逃^{みのが}さなかつた。小説は萩^{はぎ}の花妻名譽の一本^{ひともと}を發表してもらへることになつていた。

そうした日の、ある夕ぐれ、青葉の匂いを嗅^かいで、そぞろ歩きをしようと、当然帰途は美妙齋におくつてもらうつもりで訪^{たず}ねると、留守だつた。

賢^{かしこ}そうなお母さんが出て来て、まああがれ、まあ上れと進めた。

美妙齋がお母さん孝行なことは、話をしていてもわかるので、錦子もお母さんの進めに逆らわなかつた。

「あなたは、他家へはお出^{いで}になられないのでしょうか。御惣領^{ごそうりょう}では——」
と、なんとなく、お嫁にゆかれるのかというような、口うらをひかれた。

「お宅は、お妹^{いもとし}御さんおひとりですか？」

ともいった。

錦子は、美妙のお母さんのいう意味を、意識しながら、自分には優しくしてくれる祖母がいるので、大概な願いは叶^{かな}うのだというように言った。

すると、継母ではないのかときかれたので、錦子はどぎまぎした。そんなはずはないとうち消した。

「でもね、財産のあるお家の、家督を捨^{すて}て、いくらあなたが物好きでも……」
と、お母さんは考えるように言うのだった。

錦子は、ふと、暗い気がした。美妙は好きで好きで堪^{たま}らないが、このお母さんや、もつと強いおばあさんがいる、この家の者にはなりきれないと思うのだった。

そんなこと、自分だけの考えだと思っていたらば、このお母さんも、何か、そんな事を考えているのだなと思えた。

それは、錦子を感じた通りだったのだが、お母さんの方は、息子も厭^{きら}いでなさそうな娘で、丁度好^よさそうだと思うが、この娘が自分に代って炊事や、掃除^{そうじ}などをするだろうかとか考えるのだった。嫁は使いよい女中をかねなければならぬというのが、その人たちの女^お庭訓^{んなていきん}であつたのだ。

錦子は、美妙は師の君でもよいが、もつと深い交渉も持ちたかった。だが、この家庭の嫁となることは躊躇ちゆうちよされた。彼女は美妙に愛されて——それよりもつと愛されたいものが芽ぐんでいる。それは、一度根ざしたら、その生涯であらう芸術の芽だった。

「ここいらあたりで身を固めさせたい。」

賢なる母親は、あんまり年若く名をなした息子の盛名が、昨今、すこしなまっているの
で、なんとなく前途を危惧きぐしていた。地方の豪家と縁を結んでおけば——そんな下心がな
いともいわれなかった。

「武太郎は孝行ですよ。言文一致とかで書きだした時も、まっさきにあたしに読んできか
せましたですよ。あたしが、そこが、いけないといえばきつと直しました。」

おお、それは、と錦子は眼をパチパチさせた。これは大変、自分のものも、そんなふう
に差図さずされては堪たまらないと案じた。だが、

「先生は、ほんとに美しい、よいお声でございますわねえ。」

と、長い袂たもとを、膝ひざの上に、乗せたりかえしたりして、どうして、暇いとまを告げようかとしてい
た。

「山形の方もお寒いのでしょね、山田の父の出は、岩手県なんぶの山田と申すところですよ。

いいえ、あたしたちは知りませんけれど。」

美妙の母親は、江戸生れの者には、肌合はだあいが違ふ重つくるしさを、仲たがいをして離れている夫からとおなじにこの娘からも受取りながら、

「でも、あたしも医者いしやの娘ですよ。」

と笑った。東洋のシエクスピヤというような、輝かしいあだ名のあった天才を生んで、しかもその独り子が、色白で美しくつて、親孝行で、口答えくたげもしないで、他家よその女の子より優しくしてくれる、めったにない息子を持っただけに錦子が、ムンズリと押黙おしだまってしまうと、うちとけて話かけたたくても、だんだん洩はなつたくなる気がして、そう長くは引き止めなかつた。

それに、美妙がお酒好きで、飲みだすと帰りが遅くなるし女遊びをする様子も知っているだけに、

「何処どこへ寄りましたかねえ。あの人は、種いんんなことを考えているので、お友達のところへ行くと長いから。」

と、錦子に、帰るしおを与えた。

錦子は、青葉の中を、美妙と、そぞろ歩きしようという、当あてが外はずれただけではない重つ

くるしさを抱えてぼつくりを引きずって歩いた。

美妙斎の、特長のある長い顎あごも、西欧の詩人や学者のように、耳みみの辺あたりで、房ふっさりと髪を縮らせた魅惑も、逢わない時はことさらに強く思いうかべられて、こういう時には、ああいう眼をする。ああした時には、額あごよりも顎あごの方が光ると、チラチラと眼にうかぶのだが――あの人は好きで好きでならないが、彼家あすこのお嫁さんにと考えると、気が進まないのだった。

それに、樋口一葉が、好い小説を書出したので、自分ももつと勉強しなければいけないと思つてゐることを、意地わるく、しつこく思いだしたりした。美妙に逢つてゐると、励まされるのでそんなに屈託くつたくしなかつたが――

「樋口夏子は苦勞くろうしているもの。だからつて、あなたが、求めて、あの女とおんなじ苦勞をしなくつても好い。あなたは、あなたのものが生れてくるさ。それに、僕がこんなに大事にしていれば、一葉は、かえつて田沢錦子をうらやむかもしれない、いや、僕を好きなのではないが、あの女にも、恋はあろうさ。」

そんなようにもいわれた。一葉は、あの細いつこい体で、一文葉いちもんがし子の仕入れにも行くのだそうだが、客好きで、眉山びさんなどから聞くと不斷ふだんは無口だが、文学談になると姐御あねごのように

なる。そうすると、青い顔の頬ほおの上が真赤になって、顔が綺麗になるということだ。浅草の、大音寺前だいおんじまえという吉原に近いところで荒物店あらものやを出すとかいうから、そのうちに吉原を素見ひやかしながら、あの辺を通って見ようといったりして、

「そんな生計みずぎも、書くための、命をささえる代しろなのだろう。」

と、それは、思いやりのある暗い眼つきをしたが——ああ、やっぱり、競べくらものにはならないのだ。好い気になって、のんきな気持ちで聴いていたが——

（じゃあ、あたしは、何を目的に、一生懸命になったら好いのだ。）

自問自答すると、（恋愛）という答えしか出なかった。そしてまた、その目標は美妙齋だと思わないわけにはいかなかった。

錦子しんぽうが神保町へおりてくると、広い間口をもった宿屋の表二階一ぱいに、書生たちが重なって町を見おろしていた。この附近は下宿屋が門かど並なみといっていいほどあって、手すりに手拭てぬぐいがどつきりぶらさがっていたり、寝具を干してある時もあるが、夕方などは、書生の顔が鈴なりになっているのだった。

書生たちが見おろしていたのは、ヨカヨカ飴屋あめやが来ているからだだったが、飴屋は、錦子を見ると調子づいた。

ヨカヨカ飴屋は二、三人連で、一人が唄うと二人が囃した。手拭で鉢巻きをした頭の上へ、大きな盥たらいのようなものを乗せて、太鼓を叩たたいているが、畳つきの下駄はを穿いた、キザな着物を束あずまからげにして、題目太鼓の柄にメリンスの赤いのや青いきれを、ふんだんに飾りにしている、ドギツイ、田舎いなかっぽいものだった。

ドドンガ、ドドンガと太鼓を打って、サイコドンドン、サイコドンドンと囃はやした。錦子はが通ると錦子に呼びかけるように、

——お竹さんもおいで、お松さんも椎しいたけ茸ねえさんも姐ねえちゃんも寄つといで。といやらしく言つて、

——恋の痴話ちわぶみ文ナ、鼠ねずみにひかれ猫をたのんで取りにやる。ズイとこきや——と一人が唄うと、サイコドンドン、サイコドンドンとやかましく囃したてた。

二階から書生どもはワツと笑いたてた。

錦子はカツとして、どんどん寄宿している叔父の家へ帰つてくると、一層不機嫌になっていた。孝子のところから手紙が来ているといわれても、ちつとも嬉うれしくなかつた。

それでも手紙は気になった。急いであけて見ると、

——先達せんだつての「見立」の続きをお知らせいたします。あなたの好きな方のお名もあり

ますから、早くお知らせいたしたく、お目にかかるまでとっておけないので手紙にしました。お礼をおつしやい。

「文壇女性見立」

女教師鵑外、芸妓紅葉、女生徒漣さざなみ、女壮士正太夫しょうだゆう、権妻美妙ごんさい、女役者水蔭すいゐん、比丘尼くに露伴、後室こうしつ逍遙、踊の師匠眉山、町家の女房柳浪。

それからね、衆議院議員見立には、山田美妙斎は改進黨の島田しやべ郎（三郎）よ。偉いのは田辺竜子と小金井貴美子と、若松賤子しずこの三人が、女でも、その仲間にはいつていました。

「当世作者忠臣蔵見立」というのでは、
由良之助ゆらのすけが春のや（逍遙）で、若狭之助わかさのすけが鵑外で、かおよ御前ごぜんが柳浪、勘平かんぺいが紅葉で、美妙はおかるよ。力弥りきやが漣さざなみ山人なの。定九郎さだくろうが正太夫なのは好いわね。

錦子はおかるが美妙というところで、クスンと鼻で笑ったが、嬉しくなくはないが、なんとなく浮きたたなかつた。

その晩の出来ごとで、もひとつ錦子を悲しませたことが出来た。

二、三年前から女の髪剪りかみきりがはやっていたが、最初は、黒い歯の鋭い虫が噛みきるのだ

といつて下町の女たちは、極度に恐れて、呪文じゆもんを書いた紙をしごいて、髪に結びつけた
りしていたが、そのうちに、なんでもそれは、通り魔のようなもので、知らないうちに鬘まげ
を切られたり、顔を斬られたりするのだといった。

美しい娘で、外に立つていたらば、突然、痛いと思うと、頬ほぺたから血がにじみ出した
というようなことは、眼につきやすい女に多かった。

錦子が、朝目ざめて見ると、唐人髷ころうがころりと転がりおちた。

ハツと唇の色を変えて、錦子は顫ふるえあがつたが、いたずらものが忍び込んだ形跡もない
ので家の者たちは神業かみわざだと、禍わざわいのせいにした。他分、表で斬られたのを、枕につくまで
落ちずについていたのであつたろう。だが錦子は、いやあな予感がしたのだった。

七面鳥の錦嬢きんじょうという名を、近所の書生たちからつけられたのは、唐人髷を切られて
からだった。

短かい髪を二ツに割わけて、三ツ編あみのお下げにし、華やかな洋装となつた錦子の学校通い
は、神田、本郷の書生さんたちの血を沸騰させた。美妙斎の食指のムズムズしないわけは
ない。

——今日錦嬢と——

という文字は、美妙齋の日記二十四年の末からはじまっている。二十五年にいたっては、ますます頻^{ひんぱん}繁だ。

ある時は、上野^{すりばちやま}摺鉢山——あの、昼も小暗^{おくら}く大樹の鬱^{うつそう}蒼としていた、首くくりのよくある場所——上野公園のなかでも、とくに摺鉢山。ある時は九段——これも、日中あまり人通りがなかった場所だ。ある時は根津^{ねづ}の旗亭^{きてい}での食事。

ここで、一言^{ひとこと}筆者が申したいのは現今、どなたの稲^{いな}舟^{ふね}研究にも、十九で死んだことになっているが、わたしは二十三歳と信じていた。ずっと前に書いた小伝にも根拠があつて二十三と書いたのだが、この稿をはじめるとき、あまり他の年譜を信じすぎて、自分の思いあやまりかと諸説にしたがい、末年を十九にとつたために、年に無理が出来て来た。で、美妙が錦子の肩上げを見たところは十七であつたが十八にしていただきたい。もつとも、錦子の生れた地方も、他の、みちのくの国々とおなじに、丸^{まるどし}年で——満幾歳で数えていたとすれば、こじつけられないこともない。

写真も古い『文芸倶楽部』に出ていたのは、何処やら野暮くさいが、二十三の春にうつした婚礼の丸髷のは、聡明で、しとやかで、柔らかみがあり、品のある顔と、しなやかな

姿だった。

さて、傍見^{わきみ}をしないで、急ぎましょう。

十九になった錦子は、小暗い木蔭の道路での、美妙斎^{ひじ}の肘の小突き工合や、指の握りかた、その他のあしらいの荒つぽさや、丁寧さが、女の心を掴むのに、活殺自在であることを、なんとなく感知した。

側にいても、身が縮まるような悦びは、それはもう、とうに過ぎさった日となった。今は、美妙が接する女は、自分ばかりでないのを知って悲しかった。

——あたしはこんなことを仕^しに來たのではない。

そんなふうに、冷たく自分を叱ることもある。

——こんなことで、一葉に負けない小説が書けるか——

悦びといまいましさと、切なさ、幻燈の花輪車^{かりんしゃ}のように、赤く黄色く青く、くるくると廻る——そんな時に、国許^{もと}へ帰れと呼びかえされた。

「お父さんが、あんなに、お前の、書いたり読んだりするのを嫌がって、厳しくなされたのを、学校を勉強するからと出してあげたのだ。」

それがまあ、とんでもない女になって——と、可愛がった祖母までが怒っているという。

七面鳥とは、派手に美しい錦子の洋服姿であり、昨日の優美な娘風と、一夜に変わったスタイルを、書生たちは言^{いいあらわ}現したのであろうが、錦子は、たしかにその頃から、沈んだり、はしゃいだりすることが多くなつた。

「あたし、郷里^{くに}へ帰らなきゃならないのよ。だけど、いいわ。あつちにて、思いつきり勉強するの、好きもの書くわ。」

そう言つて泣かれた友達は、それも好いかも知れないと慰めて、

「なにしろ、あんまりあなた、美妙齋が好きすぎるもの。『いらつ女^め』に書いてる女^{ひと}にも何かあるんだつて？ 困るわねえ、浅草にもだつてね。」

自分の好きな男は、他女^{ひと}も好きなのだ——そんなふうに簡単に錦子に考えられたらうか？

錦子はこんなふうに思うこともある。阿古屋^{あこやひめ}姫とは誰だろう——そもじは阿古屋の貝にもまさつた宝と、何かに書いてあつたが誰だろう。あたしかしら？

——甘いささやき——

銀蜂^{ぎんばち}がブンブン言っているのでも、郷里^{くに}へ帰つた錦子は、ものごとが手につかなかつた。

だが、ふと、美妙の手許にあった、薄すべつたい、青黒い表紙の雑記帳を、一ひらめく
って見た、厭いやな思い出もおもいださないことはない。表紙うらに鉛筆のはしり書きで、

奈なまじいにあひ見る事ことのつれなきに

さりともあはで返されもせず

廿四年十一月六日作とあった。あれが、わたしへの、ほんとの美妙の心ではないかとも
思い、いえ、そんなことは決してないはずだとも打消した。

しかし、どうも、それは、はずばかりはなかったようだ。人の心は微妙であるから、
なんとも他ほかからはつきりは定めきられないが、美妙斎はそのころから関係のあった、浅草公
園の女、石井留女とめじよを、九月尽日じんじつに落籍らくせきして、その祝賀を、その、おなじ雑記帳へも
書いているのだ。

この女の人を、後のちにおつぱりだしたので、『万朝報』でたたかれて、美妙斎は失脚の第
一步を踏んだのだったが、留女を落籍した日は暴風の日であつて、一いち直ちなおから料理をとつ
て祝った。茶碗もりや、鯛たいの頭かしら付きの焼もので、赤の飯はで囃はやしたたのだ。その後、こ
の女のところへであろが、別荘、別荘、と別荘行きを毎夜しる記しつけてある。もとより、
錦嬢とあつてること、その他の女とのこともある。

これは、稲舟にも入用なことだ。稲舟の田沢錦子は、今日までの記録では、不良少女のようにいわれているけれど、そうした留女のような莫連女ばくれんおんなと同棲したからこそ美妙は、錦子のモダンな性格が一層慕わしかつたのかも知れない。

錦子はまた出京した。そしてまた帰った。どうしても郷里くりにに凝じつとしていられない気持ち——無論美妙齋からの手紙もある。それよりも彼女が出たいのだ。

錦子がそうしているうちに、郷里で、彼女を恋いたうものが出来た。それに、東京に来てから、墨田川へ身を投げようとしたような、発作ほつきを起したこともあった。

錦子に思いを寄せた郷里の男のことは、いなぶねの死後に出た秘書——美しい水茎みずくきのあとで、改良半紙に書かれた「鏡花録」によって僅わずかの人が知っているだけだ。墨田川投身も、知ってるものはすけない。

その間に書いたものが、稲舟の文壇初舞台デビューといってもよい小説「医学終業」だ。

だが、錦子が煩悶はんもんに煩悶した三、四年の間を、美妙と留女との歓楽はつづいて、前川

——浅草花川戸の鰻屋うなぎ——に行き、亀井戸の藤から本所ほんじょ四ツ目の植文うえぶんの牡丹見物ぼたんとし

やれ、万梅まんばい——浅草公園伝法院でんぼういんわきの一流割烹店かつぽうてん——で食事をし、歌舞伎座見物の

帰りは、銀座で今広いまひろの鶏とりをたべるといったふうだった。

美妙という人が、どんな生活をしてたかということが、稲舟はどうして死んだか、ということと、^{あわせ}裕の裏表になるのだが、紙数をとるから、そんな事ばかりは書いていられない。塩田良平氏が美妙の日記を研究発表されるということであるから、やがて世に知れるであろう。

とはいえ、世の中は悲しくも面白いものだ。その二十六年には、十二階に百美人の写真が出たのだ。あの、^{いちむらうざえもん}市村羽左衛門との情話で名高い、新橋の洗い髪のお妻が、^{かみゆいせん}髪結銭もなく、仕方なしに、髪をあらったままで写した写真が百美人一等当選だったのを、美妙が六銭の入場料をはらって見て、そしてお留^{とめ}のところへいつている。

四

近いうちに、どうしても東京へも一度行くという音信が、孝子のところへ、錦子から届いた。

郷里^{くに}の実家に、落附こうとすればするほどあたしはジリジリしてくる。どうして好いのか、笑って見たり、怒って見たり、^{かんしやく}疳癰をおこしてばかりいる。

あたしは、こんな事をしていて好いのかと、自分の胸を搔かきつむしっている。郷里いなかへ帰ったからって、好いものは書けやしない。ヤツぱりあたしは、美せん妙せいのそばにいななければいけないのだ。

あなたは、美妙の評判がよくないと仰しやるが、それは、あの人を女が好くので妬ねたまれるのです。それにこのごろ、紅葉の方が小説を多く書いて、美妙が休みがちなので、そんな噂うわさをするのでしょう。

実は、美妙からも出て来ないかといって下さるから、あたしはどうしても出京します。

——そんなふうな手紙が幾度か繰返されてくるうちに、ある日、錦子は、孝子の前へ笑って立った。

「いけない娘になつてしまつて——自分でも、我儘だと思ふけれど、なんだかジリジリして。」

と、謝あやまるように孝子を見る眼に、矯きよう羞しゆうをうかべた。

「あなたを、大層思つていた人が郷里に、あつたというではないの。」

「あんなの、なんでもないのよ。種いろ々なことという人随分あつたけれど、戯じやうだん談半分のよ。」

と、錦子は友達の真面目まじめなのを、ごまかしてしまおうとした。

「でも、その人は、結婚を申込んだというのじゃないの。お父さんもお母さんも、御承知なのですよ。」

「でも、どうとでも、お前の心のままにしろというから、否いやだといったの。だから、それは何でもないのよ。もともと友達のつもりだったのだから。」

そうはいったが錦子も、その男が、青くなったり、赤くなったりして涙ぐんだのを思い出すと気がめもするのだった。

「あたし、一生独立しようと心に誓って、はじめは、医者になろうかと思ったのですけれど、それもだめだったし、画師えしになろうかとも思ったのですけれど、それも駄目。やっぱり、もともと好きな文学でと思ってるのですの。けれど、それも下手へたの横好きというんですよ。自分ながら才がないので、気をもんじやって、それで始終むしゃくしゃしているのですの。だから、この頃は写真師にでもなろうかと考えていますからって断ったの。無理じゃあないでしょ。」

と言いたした。その裏に、美妙にひかれるもののある事をさとられまいとして、雄弁だった。

「色は白いけれど変なのよ、猫背ねこせなのよ、桜津さくらづつていうので、うちの女中なんか殿様ごせんだの御前ごぜんだのつてほど、華族の若様わかくさぜんとしているのよ。桜津三位中將さんみちゆうじょうつて渾名あだななの。」

「それはあなたが附けたのでしょ。」

と孝子もおかしいけれど叱るようにいった。

「嘘よ、お正月の歌がるたをした時、負けたんで額まゆずみに墨で黛まゆずみを描かれたからよ。」

いたずらっぽくはいつたが、その男は漢学くわんがくの造詣ぞうけいも深く、書家でもあつた。錦子が、

北斎ほくさいの描いたという楊貴妃ようきひの幅ふくが気に入って、父にねだつて手に入れた時、それにあう

文字を額にほしいと思つて、『文選もんぜん』や『卓氏藻林たくしそうりん』や、『白氏文集はくしもんじゅう』から経卷

まで引摺ひきずりだして見たが、気に入つた句が拾いだせないの、疳癰かんじやくをおこし、取りち

らかした書籍しよもつを、手あたり次第に引つつかんで投りほうりだしたとき、ふとした動機で桜津が

思いちがいをしたのだった。

「あたしね、怒りっぽくなつたり飽あきつぽくなつたりするつて言つたでしょ。その時も、欠あ

伸くびしながら写真帳を枕にして、だらしなく寝ころんでいたの。そしてね、おつ放り出ほした

本を引きよせて見ると、大なる長恨歌ちやうこんかの、夕殿螢飛思悄然ゆふてんへいしせねんという句が、すぐあつたじや

ないの。だから、それ書いて頂戴ちやうだいつて、桜津に頼んだの。それをね、すっかり思いち

がいしてしまつたのよ。」

と、錦子は桜津という男が、何をたのんでも、はつきりしない男だから、一ヶ月もたたなければ書いて来まいと思つていたら、すぐに書いて来て、嬉しそうにニタニタしながら、不出来ですがといったのは好いが、こんな珍本を見つけましたからって、おいていった和本のなかへ、艶書えんしよを入れて来たりして、それからは、一日に二度も来るようになったのだと、困つたというふうに話した。

孝子は、錦子が、随分變つたなあと、しげしげと見詰めていた。自分でも手紙に、我わがま儘まになつたと書いてはよこしたが、東京へ出してもらいたいために、親たちに厭いやがられるようにしたのではないかとさえ思つた。小説が書けないということと、恋心というもの、が、そんなに悪あくどい苦しみだとは、孝子には察しもつかなかったが、桜津が自分への思慕しぼだと、思いちがいをした、長恨歌の、夕殿螢飛思悄然という句を選んだということには、そんなものかなあという、仄ほのかな、ほんのりとした、くゆりを、思いしめないでもなかつた。

「だけど、あなた、山田さんと結婚する？」

「そんなこと、考えてもいないわ。」

そうはいっても、錦子は悩ましがだった。

「小説書いて、独立出来る？」

「だから、あたし、医学終業という題のは、そう思つて出京した娘が、女義太夫になつてしまふことに書いて見たの。」

ふと、二人の眼のなかには、桜の花と呼ばれた娘義太夫の竹本綾之助や、藤の花の越子や、桃の花の小土佐が乗っている人力車の、車輪や泥除けに取りついたり、後押をしたりして、懸持ちの席亭から席亭へと、御神輿のように、人力車を担いでゆくようにする、鼯鼠の書生たちが、席へ陣取ると、前にいつている仲間と一緒になつて、下足札で煙草盆を叩いて、三味線にあわせて調子をとり、綾之助なら綾之助が、さわりのところで首を振ると、ドウスルドウスルと叫ぶという、女芸人たちの、ばからしいほどな、素晴らしい人気を思いうかべてもいた。

「でも、あたし、どうしても、やつて見るつもりなの。」

錦子は自分の胸に、たしかめるように、噛みしめるように言っているのが、孝子には悲しくきかれた。

「女がなんかしていこうつての、きつと、厭なことも多いでしょうよ。どんな厭なことで

も、忍耐^{がまん}出来る？」

「どんなことだって、堪えるわ。」

その時、そうは言いきった錦子だったけれど、美妙齋との交渉が深まってくると、堪えきれないことが沢山あった。

おとなしい錦子が、書くものや、上^{うわ}つ面^{つら}だけではあろうが、なんとなく莫^{ばく}蓮^{れん}になって来た。美妙齋の影響だと、孝子は思わないではいられなかった。

「あたしの写真をね、どうしてそんな場所^{ところ}へもってらっしゃったのか、芸^げ妓^{いしや}が拾^{ひろ}ってね、あてつけだって怒ったの。お嬢さんへって宛^{あて}名^なで、随分しどいこと書いてよこしたのですって。あたしそれ見せてもらって、小説のなかへ入れるわ。」

とも錦子はいったりした。こんど来て見ると、美妙齋が、改進新聞社の勤めもやめてしまい、金港堂の『都の花』も廃刊になり、家の中が苦しそうだともいった。

改良半紙へ罫^{けい}を引いた下敷を入れて、いなぶねと署名したまま題も置かず、一行も書けない白紙へむかつて、錦子は呻^{うな}吟^なっている日がつづいた。

墨を摺^すって、細筆を幾たび濡^ぬらしても、筆さきも硯^{すずり}の岡も、乾^{かわ}いて、墨がピカピカ光つ

てしまうだけだった。

錦子は、そんな、ムシヤクシヤしたあとで、そんなにまで書けない自分を嘆きに、美妙斎の書斎を訪ずれると、今夜も留守、今夜も留守という日がつづいた。

錦子は、肩懸けでも編んで、気持ちをまぎらそうとしたが、毛糸を編む手許になんぞ心は集中されななかしなかった。ウーとうなると、グイと糸をひっぱって、編棒で突きさしたりして、丸い毛糸の玉を、むしゃくしゃに捻^ねりあげてしまった。

「おそろしくヒステリーになってるね。」

と、そんなあとで逢うと、美妙はハグラかすように言う。

「随分お留守ですね。」

「ええね。」

美妙はしやあしやあと答えて、

「別荘行きも、もうお止^やめさ。」

と、うふ、うふと胸のなかで、自分だけで笑って、別荘なんぞ、何処にあるのかと聞くと、
「それは言えんさ、それにもう、すでに過去のことだ。」

いきなり、錦子の両の頬のえくぼを、両方の人差指で、はさむようにキュツと押して、

「怒ってるの。」

と顔をもつていった。

その手を払って、錦子は顔を反した。細った横顔にも、弾力のない頬の肉にも、懊惱のかげはにじみ出ているのだが、美妙は、手のうらをかえすように別のことを冷たく言つた。

「此処の家も、もう越すんだ。」

錦子はそれをきくと、拗てなんぞいられなくなつて、すぐその話の筋へ引きこまれていった。

「君は何故つていのですか。何故つてね。僕は、このごろ四面楚歌さ。貧乏になつたのも知ってるでしょう。何にも目ぼしい作書いてないものね。そりやあ、演劇改良会をつくらうと思つて、脚本なんぞ書いたりしてはいるがね、白い眼を剥いてる奴があるから——落目さ。そりやあ、僕だつて、このままでないという事は、自信はあるけれども。」

「どうしても、このお家を、お離れにならなければ、いけませんの。」

不自由なく育つた錦子には、住居を売つて立退くということは、没落ということを、眼で見ることだと思つた。

「あたしが、いけなかったのでしょうか。」

と、自分の責せめのように、家のなかを見廻した。小説修業の女弟子などが出はいりするのが、美妙が軽薄才子のように罵ののしられる種たねなのではないかと案じた。

「そんなことは、どうでもいいさ。この辺はね、金満家の住居や、別荘には——別荘つて、妾しょうたく宅だよ。」

とニヤリとして、

「閑静で、便利でもって来いの土地さ。景色は好いし、われわれふぜいのボロ家は、だんだんなくなるさ。」

だから、今日は書齋の整理をすこし手伝ってもらおうかといった。

「ここのお室へや、なつかしくって——」

錦子が湿っぽくなるのを、

「君がはじめて来てくれたのは、二十四年だったかね。そうそう、君をおくつた歸途かえりに、巡査に咎とがめられたことがあったつけなあ。」

「あら、そんなことなんか、なかったわ。」

錦子は思い出にカツカする頬をおさえた。

「あるよ、山下町だったかでも查公に一ぺん咎められたし、たしかこの家の門前でも咎められたよ。咄はなきなかつたかねえ、自分の家へ、盗人ぬすつとにはいる奴もないじゃないか。」

フツと、莩タバコの煙を、錦子に吹きかけたが

「ハア？ 違ったかな。すると、あれは静嬢しずだったかな。そうだ、思い出した、前の日に伯母おばさんにぶたれたと言ったつけ。」

こともなげに言いはしたが、錦子の血がサツと逆流するのを意地わるくはかるように、「なにを妙な顔をしてんのさ。そんな女、今ごろいるもんかね。みんな追っぱらっちゃった。」

バタバタそこらの書籍を引っぱり出して抛り出しながら、

「あ、こないたずら書きがしてある。見たまえ。」

眼をよせて考えこんでしまっている錦子の手をグイと引っぱって差しつけたのは、労役を恥はじぬを妻とする。芸妓前髪を気にする。と二行にならべて書いてある美妙の落書したものだつた。

間もなく、小石川久堅町こいしかわひさかたまちに越すと、美妙が浅草公園の女を騙だましたという風説がやかましくなった。長い間だましていて、二千円からの金を奪ったというような悪評がたった

のだった。

赤い紙の、四頁だった『万朝報』は大変売れる新聞だった。その記事にそうしたことが載っていたのを、美妙が反駁した。

妖艶の巢窟の浅草公園で、ことに腕前の凄いいわれたおとめのことは、種にしようと思ったから近づいたのだ。三五年の研究で、人事千百がわかったから、久し振りで書こうとおもっていたところだ。そこへ新聞記事になって紹介されたのは、好い前触れ太鼓だから、責めもしない、怒りもしない。丁度よいから早速そのままを昨日から書出した。というのだった。それを文士モラル問題として、手厳しく、というより致命的にやっつけたのが、『早稲田文学』だった。

「裸蝴蝶」の問題の時には、

——これより先、裸美の画坊間の絵草紙屋に一ツさがり、遂に沢山さがる。道德家慨き、美術家呆れ、兵士喜んで買ひ、書生ソツと買う。而してその由来を『国民の友』の初刷に帰する者あり。吾人かつてゾラの仏国に出でたるを仏国の腐敗に帰せしものあるを聞けり。由来すると説くものを聞かず——

と「小羊漫言」に『早稲田文学』の総帥坪内逍遙は書いたが、おとめ問題での美妙の

反駁文には手厳しかった。「小説家は実験を名として不義を行うの権利ありや」という表題で^{かしやく}仮借なくやった。

かなり誤っている記事であろうが、それを明らかに正誤もしないで、恬然^{てんぜん}、また冷然、否むしろ揚々として自得の色あるはどうか、文壇に著名なる氏が、一身に負える醜名は、小説壇全体の醜声悪名とならざるを期せざるなりと責め、——いわゆる実験とは如何、不義醜徳を觀察するの謂か^い、みずからこれを行うの謂か、もし後者なりとせば、窃盗^{せつとう}の内幕を描かんとするときは、まず窃盗たり、姦婦^{かんぶ}の心術を写さんとするときは、みずからまず姦通を試みざるべからず——

と、悪虐を描くためには、悪虐し、殺人にはみずから殺人するか、そんな世間法^{せけんほう}な賊は、文壇にどんな功があるうとも^{よわい}齡するを^{いさぎ}屑よしとしない。特にそんな奴には警察が嚴重にしてくれ。だが科学者のいう所の觀察であろうと信じている。アジソンの「スペクター」における觀察者の義であろうと思う。ならば、觀察者は清淨無垢^{むく}の傍觀者であり、潔白^{けっぱく}雪の如くなるべきやと、堂々とやった。

美妙も思いがけなかったであろうが、錦子は泣くに泣けない激しい失望だった。

浅草公園の売茶の店は、仁王門のわきの、^{くめ}糸の^{へい}平内^{ない}の前に、弁天山へ寄って、昔の十二軒の名で、たった二軒しか残っていなかった。

観音堂裏には、江崎写真館の前側に、二、三軒あった。あとは池の廻りや花屋敷の近所に、^{かたぎ}堅気な茶店で吹きさらしの店さきに、今戸焼の猫の火入れをおいて、^{しょうぎ}牀几を出していた。

銘酒屋は、十九年の裏田圃^{たんぼ}（六区）が、赤い仕着^{しきせ}の懲役人を使用して埋め立てられてから出来た、新商売だった。

石井とめという女は、売茶女だとも、銘酒屋女だともいうが、ともかく美妙は、おとめを二百円の身^みの代^{しろ}金^{きん}をだして、月三十円かの手当をやり、物見遊山^{ものみゆざん}にも連れ廻り、着ものもかつてあてがった——後のことは分らないが、はじめの支出を書いた日記を、錦子に開いて見せて、

「僕が、こんなことで厭になったのなら仕方がないが、君だけは、小説家としての僕を、知ってくれるはずだが——」

と、^{うら}怨み^みつぽくさえいうのだった。

他人が見捨るなら、あたしは——という、不思議な反抗心が、一度は美妙に失望した錦

子に、美妙を救おうという気を起させた。

そして、そう思ったことが錦子にとって、今までにない楽しさをもって来た。天涯孤立となった美妙は、錦子を、いなぶね女史として無二の話し相手にしだした。錦子にとっては嬉しいことばかりだった。愛されるばかりでなく、急に一人の文学者として、美妙に遇されるようになったのだから――

人の噂うわさも七十五日、あれまでにやられると美妙斎も復活しだした。稲舟も『文芸倶楽部』が博文館から発行されると、前に書いてあった「医学終業」を出して、目をつけられるようになった。「白ばら」は最初はじめての閨秀けいしゅう作家号に載るし、「小町湯」や美妙との合作もつづいて発表された。

稲舟の作品は、美妙を離れないともいわれた。美妙に、令嬢氣質かんぎを捨てろともいわれたためか、お転婆てんぱな、悪達者わるだつしやだともいわれ、莫蓮女ばくれんおんなのようにさえ評判された。美妙との関係がそうさせたのもあるし、そんな、ゴシップ的ばかりでなしに、女流作家のなかでの人気ものにした。

二人の結婚は、誰が見ても、するのが当然のようになっていながら、おそろしく気にされていたが、錦子がその相談に郷国くにへ帰ると、すぐあとから美妙斎が追っかけていて、

近くの旅館に宿をとつて、嫁にもらつて行きたいと切り出した。

美妙斎は居催促いざいそくでせがむし、錦子はなんでもやつてくれという。めんくらつた親たちや祖母は、やつと、一家が帰依きえしている学識せうしのある僧侶そうりよに相談して、町の人がその問題に興味をもちはじめたのを防いだが、相続人だから千円のお金を附けたということを、町では噂うわさした。

新婚の夫妻となつて、作並温泉さくなみから歸つて来たのは二十八年の暮も、大晦日おおみそかの三、四日前だった。

それと、前か後かわからないが、筆筒たんす二十円、ボンネット七十円、夜具ふとん八十円何がいくらと、八十銭のあしだまで書きならべて、新聞紙であまり書きたてるから、披露しないわけにはゆかない、これだけの品代金を、金で送つてくれと、錦子は生家に四百何十円かをせびつた。

来客には派手な社会の者もあり、見られても恥かしくないようにしたい。今は離れの一室こもに籠こもっているが笑われたくないとか、山田家で立たてかえるとしても、悠暢ゆうちやうに遊ばせている金ではないとか、披露の式は都下の新聞紙にも掲載されるだろうから、その費用の領収証は取り揃えてお目にかけるといふような下書きは、美妙が書いて渡した。

華やかな嵐あらしを捲まき起おこしたこの新夫婦、稲舟美妙の結合は、合作小説「峰の残月」をお土産みやげにして喝かつ采さいされた。

しかしまた、別種の暴風雨あらしが、早くも家のなかに孕はらみだしていたのだ。

世間的に美妙が蟄ちづ伏ぷくしていた時には、心ならずも彼女たちも矛ほこを伏せていた、おかあさんとおばあさんは、美妙の復活を見ると、あの輝かしかった天才息子を、大切な孫を、嫁女よめじよが奪うばつてしまつて、しかも、肩をならべて文学者面づらをするのが氣にいらぬ。

「僕を可愛がつているんだから——」

と、美妙はとりなすが、美妙が大祖たいそと称するところの、八十五歳の養祖母おます婆さんは、木乃伊ミイラのごとき体から三途さんずの川の脱衣婆おばあさんのような眼を光らせて、姑しゅうとめおよしお婆さんの頭越にらしに錦子を睨にらめつけた。

美妙の父吉雄が、およしの妹とずっと同棲どうせきしていて、帰らないというのも、この大祖お婆さんがいるからだということを、錦子は嫌きらいほど悟さとらせられた。

だが、そうした女傑めいさが、二人も鎮座することは、錦子も承知の上だった。その覚悟はしていたのだが、耐えられないのは、日本橋に出ている芸妓に、美妙の子供が出来かけている——ということだ。狭い家庭内で、三人の女に泥渦どろうずを捏こねかえさせないではおかなか

ったのだ。

錦子は半狂乱のようになった。そんな時期だったのだろう。錦子は墨田川へ身を投げようとした。――墨田川！ それは、ふうちゃんの水をみつめていた、あの橋の上流だ。

結婚してたった四月、お金を無心にやられたのだともいうし、離縁されて帰されたのだともいい、体の悪いのを案じて出京した母親が、連れもどったのだともいわれているが、そのうちのどれにしても帰りにくかった古里へ、錦子は帰らなければならなかったのだが、故郷にも待っている冷たい眼は、傷心の人を撫てはくれない。

憂鬱の半年、身をひきむしってしまいたいような日々を、人形を抱いて見たり投りだしたり、小説を書けば、「五大堂」のように、没身心中を思ったりして、錦子はだんだんに労れていった。

事あれかしの世間は、我儘娘の末路、自由結婚、恋愛三昧の破綻を呵責なく責めて、美妙に捨られた稲舟は、美妙を呪って小説「悪魔」を書いていると毒舌を弄した。

錦子は、そうまでされても美妙をかばった。そんなものは書いていないということを、紅葉の文芸欄といってもよい、『読売新聞』によって、「月にうたう懺悔の一節」を発表してもらったが、自分が悪かったということばかりいつている、しどろもどろの長歌み

たいなものだった。

恋とはそうしたもののか、そんな中でも、美妙へは消息していた。手紙では人目が煩さいので、書籍の行間に、切ない思いを書き入れては送った。

秋の早いみちのくに、九月の風がサツと吹きおろすと、ホロホロツと白露は乱れ散った。それを見ていた錦子の、張り切っていた気持ちに崩れが来て、白い粉の薬を飲んだのが廿三の彼女の一期の終りだった。花をさして、机の上に一本の線香をくゆらして――

私は、今日耳にしたのだが、その時、錦子を絶息から甦えらせて、四、五日保たせたのは、錦子の許婚の人で、それから、その医師は、はやったということだ。

この、明治二十九年には稲舟をさきに、一葉も散り、若松賤子も死んでいる。生前、さほどいじめなくてもよかった稲舟への同情は、再び美妙へのモラル問題となった。それは直に、日本橋の妓を正妻にしたからかも知れない。

今は、七十を越して、比丘尼のように剃髪している石井とめ女を、途中で見かけたという便りを叔父からもらったが、この章を終るまでに探ね出せなかったので、錦子との交錯は不明だ。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「春帯記」岡倉書房

1937（昭和12）年10月発行

初出：「東京朝日新聞」

1937（昭和12）年3月27日～4月21日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田沢稲船

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>